

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや10年。
オーナーコピーライターのひとりいっ。

ウフの我が家

『さようなら、

我が家。』

その2

突然の辞令に驚き戸惑う我が家。それでも前に進んでいかねばと、各種手続き、情報収集、身辺整理等が始まった。3年か、5年か：転勤の期間がどれほどになるのかは誰にも分からないけれど、とりあえず5年間を想定して、この家の借主を探すことにした。

娘は寂しがり、「私の家」を知らない人に貸すことを拒んだが、もうどうしようもない。いづれ必ず帰ってくるのだからと言いつつ聞かせる他なかった。

5年限定という条件にも関わらず、借りたいと言ってくれる人は幸いにも複数現れた。中には「スウェーデンハウスに一度住んでみたいから」という理由の人もいた。そして実際に内見した人たちは皆「ぜひ」という言葉を残して帰って行かれた。

できるなら、この家の良さをしっかりと理解して住んで欲しい。この家を好きになって欲しい、この家で幸せな時間を過ごして欲しい…この家は特別なからだ。この家はスウェーデン

ハウスなのだから——今になってその時のことを振り返ると、なんだか傲慢だったかなと思えるほど、我が家に住んでくれるかもしれない人に会うたびに、私たちは必死でスウェーデンハウスの説明をしていた。

ほどなく借り主が決まると、バタバタと手続きが始まった。想像以上に煩雑で、時間もかかる大変な作業だったが、大切な家を留守にするのだ。細かいことまできちんとしておかねばならない。

そうこうしているうちに、夫は一足先に赴任先の上海へ旅立った。山ほどの雑用と荷物を置き去りにして。

私と娘は、二人で荷造りを始めた。上海、実家、貸倉庫：10年間の思い出を、行先別に仕分けして段ボールに詰め込む。以前は自他共に認める引っ越し好きで、引っ越しで人生リセット&ステップアップ!などと思っていたのに、今回はちよつと様子が違う。寂しさだけが込み上げてくる。「いづれ必ず帰ってくるのだから」——娘に言ったはずの言葉を、何度も何度も自分に言い聞かせ、止まりそうになる手を必死で動かした。

(つづく)

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや10年。
オーナーコピーライターのひとりだ。

ウフの我が家

『さようなら、我が家。』

その3



最後の荷物が運び出された我が家は、こんなに広かったかしらと思うほど、がらんとしていて、ひんやりと静かで、そして寂しい。10年前、2歳前の娘の手を引き、この家へやって来た時のことを思い出す。パインの色は10年経って飴色に変わり、床や壁には細かな生

活の痕跡が見られるけれど、正直ちつとも古びていない。一種の親バカのような「ひいき目」なのかもしれないけれど、気おくれするようなピカピカの新築にはない、重さというか、深さというか：豊かな「何か」が育った気がする。素敵な家だ。
退去後すぐにクリーニン

グが入ることは分かっていたけれど、それでもと、雑巾を絞って畳や床を拭いて回った。

かくして日本を出発した私と娘は、夫の待つ上海へと向かった。

学生時代、広大な自然に憧れて旅をしたのは、天安門事件の直後だった。上海はまだまだどこか垢抜けず、暗く、閉鎖的だったが、街を行き交う人々のエネルギーたるや、鬼気迫るものがあつたのを記憶している。

今や中国最大の都市となった上海。特にこの数年間で急激な発展を遂げ、その姿を変えてきた。林立する高層ビル、お洒落なカフェ、老いも若きも手にはスマートフォンを持ち、生活面のほとんど

をそれで処理する：NYやロンドン、パリや東京と肩を並べる大都市に変貌したのだ。ある日突然巨大スコーパーがオープンしたり、ザリガニ屋がブティックに変わったたり：流れの速い川のように、いろいろな景色が浮かんで消える。「魔都上海」とは、よく言ったものだと思う。

新しい我が家は、そんな上海の金融街のど真ん中。30階建てのマンションの18階だった。先に半年住んでいた夫が意気揚々と案内してくれるが、私も娘も、引越越し荷物に詰め込んでこれなかった「何か」に心が揺れる。「おじやまします」と言いながら扉を開けて、スーツケースを運び入れた。

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや11年。
オーナーコピーライターのひとりいっ。

ウフの我が家

10年間住み慣れたスウェーデンハウスをリロケーションし、上海での生活が始まった。最初の数日は、手続きや食事の算段に振り回されていたが、一つひとつ物事が落ち着いてくるにしたがって、今までとは違う文化・環境に驚いたり、感心したりすることが多くなってきた。国が違う、文化が違う。気候が違えば育つ植物も違い、人々の思考回路も違うのだ。何もかも

が違って当然。郷に入れば郷に従え。面白がって楽しむことにした。

買い物や運転、食事の仕方、子育ての常識：道路の渡り方ひとつとっても、慣れ親しんだやり方といちいち違う。最初こそ「え？なんで？」と戸惑ったが、そこは悠久の歴史の中で確立された中国文化。深く知れば知るほど、それぞれに大納得の理由があったりして、なんとも興味深い。

小さな例だが、お店で水の入った水が出されることはまずない。ビールだって真夏でも常温だ。何故か？中国人の人は、冷たい物で身

『なるほど、異国』

体を冷やすのは健康に良くないことを、小さい頃から教えられているからだ。少しくらしい体調不良は「おうち漢方」で治してしまうほど、彼らの食養生の知識はすごい。まさに医食同源。日々の食べ物には全て薬だと言っている友人さえる（なんかすごく、カッコイイ）。

気候や習慣が違えば、スタンダードスタイルも変わる。快適だったスウェーデンハウスのことが頭をよぎる…。北欧住宅の良さをそのままに、でも、日本の文化や暮らしに沿って、改良・工夫されていた。いやまったく、心地の良い家だった。（続）

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや11年。
オーナーコピーライターのひといつぶ。

ウッの我が家

『また会う日まで』

上海に来てから二度目の冬がやってきた。時が過ぎる速さに、心のスピードがやっと追いついてきたようで、近頃は自分のペースで、穏やかな日々をおくっている。海外と言っても今はどこにいても、誰とも繋がっていない時代だ。多少の規制はあるにせよ、それでも両親や友人たちと容易に連絡を取り合

うことができるのだから、有難い話である。

私たちのスウェーデンハウスに住んでくれている家族からも、季節ごとに連絡がくる。お貸しする際に「数年だとしても、スウェーデンハウスに住めるなんて嬉しい」と言ってくださったご主人は、とても誠実かつ筆まめな人で、庭木の様子

や、メンテナンスのこと、また、「ウッドデッキで月見をしました」「友人たちを呼んで食事会をしました」等、折に触れ楽しい様子を伝えてくれる。

そりゃあそうだろう、スウェーデンハウスだもの。私たちの家だもの。快適でしょう。楽しいでしょう。お月見かあ……いいねえ——幸せに暮らしてくださっていることに心からほっとしながらも、ほんのちよつと、1%か2%……もう少し多いかな？（笑）……嫉妬に似た感情があることも、また事実。望んでリロケーションしたはずなのに、なんと心の狭い私であることよ！

家は道具だと言う人もいる。雨風防げればそれでいいと言う人も。実際そうなのか、

もしれない。でも私にとつてのスウェーデンハウスは、ただの家ではない。離れがたい友人のような、温かい家族のような、誰にも取られたくない恋人のような……そんな存在なのだ。

物であれ、人であれ、「代わりになるものがない」という存在に出会えることは、幸せだ。一生のうちに、一体いくつそんな出会いがあるだろうか。今、帰りたい場所がある——私は、とても幸せだ。

何年後になるだろう。ふたたび「ウッの我が家」に戻ったら、私はどんな気持ちになるだろう。どんな毎日になるだろう。その時になったら、またこうやってひとりごとを書かせてください。それまでどうか、お元気で！